

9. 農 学 部

I	農学部の教育目的と特徴	9-2
II	分析項目ごとの水準の判断	9-4
	分析項目 I 教育の実施体制	9-4
	分析項目 II 教育内容	9-5
	分析項目 III 教育方法	9-7
	分析項目 IV 学業の成果	9-11
	分析項目 V 進路・就職の状況	9-13
III	質の向上度の判断	9-14

I 農学部の教育目的と特徴

【教育目的と特徴】

日本有数の食料生産基地である佐賀平野に立地する佐賀大学農学部の目的は、「食糧」、「生命」、「環境」、「エネルギー」、「情報」、「地域社会」という重要な課題を解決するための総合科学である農学の発展と、社会的に活躍できる人材の育成である。この目的を達成するために農学部は、学部設立時（昭和 30 年）から現在に至るまで、我々の生活に必要な生物の生産と利用に関わる教育をとおして、人類の繁栄に貢献できる豊かな教養と深い専門知識を備えた人材を育成してきた。農学部における学部教育の特徴は、学生と教員間のコミュニケーションを重視しながら、卒業研究の完成をゴールとする、農学教育の実践にある。

【3 学科の教育目的】

農学部は、学科改組（平成 18 年 4 月）により、2 学科（生物生産学科、応用生物科学科）から 3 学科（応用生物科学科、生物環境科学科、生命機能科学科）の構成となった。それぞれの学科の教育目的は、次のとおりである。

応用生物科学科の目的は、多様な生物の諸特性の解明・改良・活用、有用生物の生産や、生物間の相互関係に関わる諸問題を解決し、社会に貢献できる人材の育成である。

生物環境科学科の目的は、環境保全と持続的食料生産のための技術開発及び資源循環型地域社会の構築を担う人材の育成である。

生命機能科学科の目的は、生命科学についての基本的な理解を深め、科学的に思考できる人材の育成である。

【アドミッションポリシー】

農学部および 3 学科の教育目的に基づいて、アドミッションポリシーを定め、ホームページで公開している（表 1）。

表 1. 農学部 3 学科のアドミッションポリシー

<p>応用生物科学科</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 本学科の教育・研究の目的と内容（多様な動植物の生理生態的特性の解明、バイオテクノロジーを用いた有用生物資源の開発・利用、有用動植物を加害する病害虫の制御、等）について理解と関心がある人 2 本学科の教育研究の内容を理解するための基礎となる授業科目（生物、化学、数学、英語、国語、等）を履修している人 3 問題解決に向けて、粘り強く自己研鑽につとめる熱意と実行力がある人 4 本学科で学んだことを活かして社会で活躍したいという目的意識と向上心がある人
<p>生物環境科学科</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 自然環境、社会環境、及び生物の生産環境の保全と修復に興味をもつ人 2 永続的な農業を可能にする新たな生物生産システムと経済社会システムの創造に意欲のある人 3 生物産業あるいは環境科学の分野で、研究者、技術者として国際的な視野で活躍する意欲のある人
<p>生命機能科学科</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 生体における遺伝子の発現や物質代謝とそれらの調節機構を分子レベルで理解するライフサイエンス、食品の生体調節機能、栄養機能や安全性などに興味を持っている人 2 将来、本学科で学んだ知識や技術を社会で活かそうと考えている人 3 化学的手法を多用しますので、化学はもちろん生物、物理、数学など理系科目が得意で、英語、国語、社会などの基礎学力を十分身につけている人

（出典：佐賀大学農学部ホームページ）

【入学試験】

多様な学生の入学機会を保障するため、一般入試（推薦入試、前期日程入試、後期日程入試）と特別選抜（私費外国人特別選抜、帰国子女特別選抜）を実施している。

平成 16 年度から 19 年度の学科別の志願者倍率は、3.9 倍から 6.5 倍である（表 2）。

表 2. 農学部の志願者倍率

学科（入学定員）	平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度
生物生産学科（65 人）	4.9	4.8	—	—
応用生物科学科（80 人）	6.0	5.2	—	—
応用生物科学科（45 人）	—	—	5.0	4.7
生物環境科学科（60 人）	—	—	3.9	5.1
生命機能科学科（40 人）	—	—	6.5	5.5

備考：農学部の入学定員は、学科改組前も改組後も 145 人である。

（出典：アドミッションセンター入試統計資料）

【想定する関係者とその期待】

農学部の教育目的と特徴と対応して、学部教育の関係者と関係者の期待を、次のとおり想定している(表 3)。

表 3. 教育面からの農学部が想定する関係者と関係者の期待

想定する関係者	関係者の期待
入学志願者	農学部の教育目的・目標の分かりやすい公表 入学志願者に対する多様な説明機会の提供（オープンキャンパス、ジョイントセミナー等）
在学学生	学生の期待に応える体系的なカリキュラムの編成 学生の学習意欲に応える、分かりやすい授業の提供 学生が学習しやすい環境の整備
卒業生	社会人として活躍するために必要な教養と専門知識の修得 卒業後も相談に乗れる学部の体制整備
在学学生の保護者（家族）	学生に対する良好な学習環境の提供、学力の定着、就職・進学
卒業生の受入れ企業・ 地方自治体・国	社会生活に必要な教養と職務遂行に必要な基礎的な専門知識 自ら学び取る積極性を持つ人材の育成
地域社会	地域社会と地域産業の理解者と、地域の担い手の育成
本学の教職員	本学および農学部の理念・目標・目的を達成するための教育活動を実践しやすい組織・制度の整備

II 分析項目ごとの水準の判断

分析項目 I 教育の実施体制

(1) 観点ごとの分析

観点 I - 1 基本的組織の編成

(観点に係る状況)

農学部は、それぞれの教育目的に応じた講座を設置している (表 4)。

表 4. 教育研究組織

学科	講座	教育研究分野
応用生物科学科	生物資源開発学	熱帯作物改良学, 動物資源開発学, 植物工学, 植物代謝解析学, 蔬菜花卉園芸学, 果樹園芸学, 植物遺伝育種学
	生物資源制御学	植物病制御学, 植物ウイルス病制御学, 線虫学, 昆虫学, システム生態学, 動物行動生態学
生物環境科学科	生物環境保全学	地圏環境学, 水環境工学, 浅海干潟環境学, 環境地盤学, 生物環境学
	資源循環生産学	農業生産機械学, 生産システム情報学, 施設農業生産学, 作物生態生理学, 資源循環フィールド科学
	地域社会開発学	地域ビジネス開発学, 地域資源学, 人類生態学
生命機能科学科	生命化学	生化学, 機能高分子化学, 応用微生物学
	食糧科学	生物資源利用学, 食品化学, 食糧安全学, 食品栄養化学

(出典: 佐賀大学農学部「履修の手引」)

農学部の教員は、講座内の教育研究分野 (計 33 分野) に所属し、教育と研究を遂行している。教育研究分野の構成は各講座からの発議に基づかせることにより、教育研究に対する社会的な要請に弾力的に対応することができる。

各学科の入学定員と現員は表 5 のとおりである。専任教員の構成は表 6 のとおりであり、大学設置基準に定められた専任教員数を充足している。多様な科目を学ぶ機会を増やすために、学内の他学部教員および学外講師による授業科目を開講している。

農学部附属資源循環フィールド科学教育研究センターの教員は、センターにおけるフィールド実習等の指導に加えて、所属学科等の教育も担当している。学内共同教育研究施設である海浜台地生物環境研究センターおよび総合分析実験センターの教員も農学部の学生に対する教育を担当している。

表 5. 農学部の入学定員と現員

(19.5.1)

学科	入学定員	現員			
		1 年次	2 年次	3 年次	4 年次以上
生物生産学科	65	—	—	79	87
応用生物科学科	80	—	—	93	98
応用生物科学科	45	51	51	—	—
生物環境科学科	60	61	63	—	—
生命機能科学科	40	42	43	—	—

備考: 入学定員は、学科改組前 (2 学科) も改組後 (3 学科) も 145 人である。

(出典: 佐賀大学入学者選抜要項ならびに資料 A2-2007 入力データ集: No.3-1 学生年次別)

表 6. 農学部の教員 (19.5.1)

学科等	計	教授	准教授	講師	助教
応用生物科学科	16	8	7	0	1
生物環境科学科	22	10	8	2	2
生命機能科学科	13	7	4	1	1
資源循環フィールド科学 教育研究センター（注）	4	1	2	0	1

注：資源循環フィールド科学教育研究センターの教員は、教育組織である生物環境科学科に所属。

観点Ⅰ－２ 教育内容，教育方法の改善に向けて取り組む体制

（観点に係る状況）

農学部の教育課程の編成や教育方法等の改善に係わる重要事項は、各学科・教育コースから選出された教員で構成する農学部教育委員会で審議され、具体的な方策等が学科会議やコース会議で周知されている。ファカルティ・ディベロップメント（以下、FD と略す。）の立案も教育委員会内に設置されている FD 専門委員会が担当している。

「学生による授業評価アンケート」は継続的に実施しており、平成 18 年度からは、実験、実習等を含む全科目で授業評価を実施している。各教員は、授業評価の結果に基づいて授業内容を点検し、その結果をライブキャンパス（Live Campus : Academic Affairs System for Teachers（授業点検・評価））上で公開している。学部開催の FD 講演会を開催するとともに、授業評価の報告書を教員へ周知することにより、シラバスの改善・更新に役立っている。講義室および実験室の映像教材利用環境を整備し、学生の授業理解の向上に役立つ液晶プロジェクターなどの利用を容易にした。「どがんね、こがんよ、学生懇談会」では、学生の意見・要望等を全学的な視点から汲み上げ、授業等の改善に活用している。

（２）分析項目の水準及びその判断理由

【水準】

教育の実施体制は、期待される水準を上回る。

【判断理由】

- 1 農学部の理念・目的を達成するための学科構成と教員配置は適切である。
- 2 教育研究分野を柔軟に変更できるシステムを持ち、教育環境の変化に対応できる。
- 3 教育の充実に必要な学科と附属センター等との連携が密である。
- 4 農学部独自の取組として、学生による授業評価の実施体制が早期から整備され、実行されている。
- 5 学生の授業評価に基づくシラバスの改善・更新がなされている。

分析項目Ⅱ 教育内容

（１）観点ごとの分析

観点Ⅱ－１ 教育課程の編成

（観点に係る状況）

卒業要件（単位数）は、各学科とも 126 単位（教養教育科目 37 単位，専門教育科目 89 単位）である（表 7）。

表 7. 授業科目区分の内訳と農学部の卒業要件

学 科	教養教育科目								小 計	専門教育科目			小 計	合 計	
	大学 入門 科目	共通基礎教育科目						主題科 目		専 門 基 礎 科 目	農 学 基 礎 科 目	専 門 科 目			
		外国語科目		健康・スポ ーツ科目		情報処 理科目		分 野 別 主 題 科 目							共 通 主 題 科 目
		英 語	独 語 仏 語 中 国 語 朝 鮮 語	講 義 ・ 実 習 演 習	講 義 ・ 実 習	講 義 ・ 演 習 I									
応用生物科学科	2	4	4	2	2	2	1	20	37	4	6	79	89	126	
生物 環境 科学 科	生物環境保 全学コース	2	4	4	2	2	2	1	20	37	4	6	79	89	126
	資源循環生 産学コース	2	4	4	2	2	2	1	20	37	4	6	79	89	126
	地域社会開 発学コース	2	4	4	2	2	2	1	20	37	4	6	79	89	126
生命機能科学科	2	4	4	2	2	2	1	20	37	8	6	75	89	126	

(出典：佐賀大学農学部「履修の手引」)

数学、物理学、化学、生物学を学習させる専門基礎科目は、1年前期に配置することにより、理数系科目の基礎学力を向上させ、専門教育への円滑な移行を進めている。学力差が大きい数学では、学力別クラスを編成している。

農学部の中心的な授業科目（コア科目）として、1年次および2年次の学生向けに、農学基礎科目（5科目）を開講している（3科目が選択必修）。そのほかの必修科目は、各学科、コースの特徴を生かせるよう配置している。例えば、生物環境科学科の必修科目は、各コースが開設する概説、科学英語、卒業研究である。

全ての授業科目の内容（授業目的、授業内容、成績評価の方法等）に係る情報は、オンラインシラバス（LiveCampus：Academic Affairs System for Teachers（シラバス））により、学生に提供している。

学科改組に伴い、平成18年から、新旧のカリキュラムが並存しているため、授業時間割は大変窮屈であるが、教員の努力により、滞りなく授業は実施されている。

観点Ⅱ-2 学生や社会からの要請への対応

（観点に係る状況）

多様な科目を履修する機会を提供している学内開放科目を履修して取得した単位は、自由科目として、卒業要件に加えることができる。単位互換制度に基づく熱帯農学総合実習（琉球大学）などの科目を受講することにより、学内では得難い経験ができる。3年前期に開講する、企業や試験場などで行うインターンシップの単位（2単位）を認定している。

編入学生については、本学部に入学期後の学習を容易にするために、短期大学等で修得した単位を、本学部の定めに基づいて、本学部の単位として認定している。科目等履修生と研究生2～4名程度が在籍している。

海外の大学と密接に連携し、外国人留学生を積極的に受け入れるとともに、本学部学生の留学を支援している。留学生、社会人入学生、編入学生、障害のある学生など、特別の支援が必要な学生のために、留学生担当講師、留学生センター委員会、教育委員会、学生委員会の連携により、学習支援を行っている。

資源循環フィールド科学教育研究センターと農学部の教職員の地域貢献活動（伊万里はちがめプラン、蕨野の棚田支援、水みちマップ運動への参加、食育教育、等）は極めて活

発であり、これらの活動の一部は、正規の授業カリキュラムとして実施している。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

【水準】

教育内容は、期待される水準にある。

【判断理由】

- 1 教養教育と専門教育が適切に配置されている。
- 2 学科横断的な農学基礎科目の設置等、総合科学である農学の特性に合うカリキュラムを構築している。
- 3 他学部教員等が開講する科目の履修を薦め、自由科目として単位を認定している。
- 4 各学科の教育目的を達成するための必修科目が適切に配置されている。
- 5 編入学生や留学生を積極的に受け入れる体制を構築している。
- 6 海外の提携校への留学支援を進めている。
- 7 地域社会の要望に応える地域貢献授業が充実している。

分析項目Ⅲ 教育方法

(1) 観点ごとの分析

観点Ⅲ-1 授業形態の組合せと学習指導方法の工夫

(観点到に係る状況)

観点Ⅲ-1-1 (授業形態のバランス)

授業科目は、学科共通の科目と、学科別の科目で構成している。学科共通科目(必修)は、コミュニケーションと動機付けを重視する「大学入門科目」と、専門科目を理解するために必要な専門基礎科目である。授業科目の内容と実施方法は農学部履修細則に記し、学生に丁寧に説明している。

授業形態は、各学科の教育目的と学年進行と関連づけて、講義・演習・実験を適切に組み合わせている。学科改組後の卒業要件(単位数)は3学科共通(教養教育科目が37単位、専門科目が89単位、合計126単位)であるが、専門科目の授業形態別内訳は、教育目的を達成するために、学科により異なる(表8)。

表8. 農学部専門科目の授業形態別単位数(改組後の卒業要件)

学科	コース	講義	演習	実験	卒業研究
応用生物科学科	—	75	2	4	8
生物環境科学科	生物環境保全学	79	2	0	8
	資源環境生物学	77	0	4	8
	地域社会開発学	79	0	2	8
生命機能科学科	—	70	0	11	8

(出典：佐賀大学農学部「履修の手引」)

農学部3学科の学生が履修する専門科目の必修科目と選択必修科目は、表9のとおりである。

表 9. 専門科目の必修科目及び選択必修科目（一覧表）

学科		専門基礎科目	農学基礎科目	専門科目
応用生物科学科		化学 生物学		植物生産学, 熱帯農業論, 遺伝学, 応用動物昆虫学, 生物統計学, 植物育種学, 植物病理学Ⅰ, フィールド科学基礎実習Ⅰ, 生物学実験, 応用化学実験, 果樹園芸学, 蔬菜園芸学, 応用生物学実験, 科学英語, 生物科学英語, 生物情報処理演習, 卒業研究
生物環境科学科	生物環境保全学コース	数学, 物理学 化学, 生物学 のうち 2 科目 4 単位	作物生産学, 動物資源開発学, 土壌学, 生物化学, 食品流通学 のうち 3 科目 6 単位	生物環境保全学概説, 資源循環生産学概説, 地域社会開発学概説, 実験生物環境保全学Ⅰ・Ⅱ, 科学英語, 生物環境保全学演習, 卒業研究, (実験水気圏環境学, 実験地圏環境学, 実験生物環境学のうち 1 科目)
	資源環境生産学コース			生物環境保全学概説, 資源循環生産学概説, 地域社会開発学概説, 栽培技術論, 栽培環境制御学, 農業生産機械学, フィールド科学基礎実習Ⅰ・Ⅱ, 生物科学実験実習, 科学英語, 卒業研究
	地域社会開発学コース			生物環境保全学概説, 資源循環生産学概説, 地域社会開発学概説, 地域資源論, 人間開発論, 地域ビジネス開発論, フィールドワーク基礎演習, フィールド科学基礎実習Ⅰ, 科学英語, 卒業研究
生命機能科学科		数学 物理学 化学 生物学		物理化学, 有機化学, 分析化学, 化学実験Ⅰ, 生物有機化学, 生化学, 生物物理化学, 微生物学, 生命科学概説, 食糧科学概説, 食品衛生学, 栄養化学, 食品化学, 分子生物学, 生化学実験, 化学実験Ⅱ, 微生物学実験, 科学英語, 生物学基礎実験, 卒業研究

(出典：佐賀大学農学部「履修の手引」)

上記の科目に加えて、単位互換制度に基づく宿泊実習やインターンシップなども履修できる（表 10）。

表 10. インターンシップ等による単位取得者数

区分	平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度
インターンシップ	29	29	16	20
単位互換制度に基づく科目履修	1	3	5	0
科目等履修生	1	2	0	0

(出典：教務情報システム成績管理データ)

専門科目の教育効果を上げるために、受講者数は、授業形態に応じて定めている（表 11）。

表 11. 専門科目の授業形態別の履修者数

年度	学期	講義	演習	実験・実習
平成 16 年度	前学期	52 (6～168)	14 (3～81)	25 (1～51)
	後学期	53 (3～125)	10 (5～19)	19 (1～55)
平成 17 年度	前学期	56 (2～168)	18 (1～84)	29 (5～55)
	後学期	52 (3～168)	8 (5～19)	19 (1～55)
平成 18 年度	前学期	51 (0～157)	15 (4～76)	25 (4～52)
	後学期	51 (5～152)	9 (4～12)	19 (2～49)
平成 19 年度	前学期	42 (1～184)	14 (4～42)	33 (1～93)
	後学期	69 (2～181)	10 (1～22)	19 (1～75)

備考：カッコ内の数値は、履修者数の範囲（最少～最多）を示す。数値には、卒業研究を含まない。

(出典：教務情報システム履修管理データ)

履修放棄者を除いた専門科目（178科目）の単位取得率は高く、演習・実験・実習では99%を超え、講義形態の科目では約93%である（表12）。

表12. 専門科目の授業形態別単位取得率（平成18年度）

講義	演習	実験実習
92.8%	100%	99.5%

備考：数値は、受講者数に対する単位取得者の割合を示す。履修放棄者は除く。

（出典：教務情報システム成績管理データ）

観点Ⅲ-1-2（学習指導法の工夫）

学習指導法は教育目的と深く関連するため、授業科目の説明書を学生に配布し、説明している。履修ガイダンス、大学入門科目の中で実施される研究室訪問、附属図書館ガイダンス、就職関係者ならびに本学部卒業生によるキャリア教育は、農学部で学ぶ意義と方法についての理解を深めるために実施している。

学習上の課題を抱える学生に対応するため、オフィスアワーを設定している。平成19年度にはチューター（担任）制度を導入し、学生に対する相談機能を強化した。

農学部1号館の改修は平成18年度末で完了し、講義室・演習室・学生実験室の勉強環境が改善された。このことにより、授業形態に合わせた講義室の利用が可能になった。労働安全衛生法遵守の一環として、「実験実習における安全の手引き」を学生へ配布して説明し、安全確保に努めている。

大学教育に関する法令の一部改正と農学部の学科改組に対処するため、専任教員による授業科目の担当を定め、主要授業は教授、准教授が担当するようにした。学生実験や演習など人手を要する科目については、TA活用による教育効果の向上を継続的に図った。

学力差が大きい数学（専門基礎科目）では到達度別クラスを編成し、教育効果を上げている。化学および生物学の基礎学力が不足している学生については補習した。

専門科目の受講者数の平均は、実験・実習科目で約24名、演習で約12名、講義で約49名であり、受講者数が100名を超える講義は約8%以下である。受講生が少ない科目では、コミュニケーション（フィードバック）を重視した授業を実施している。高校における情報処理科目の必修化を念頭において、多くの授業科目で、液晶プロジェクターなどのIT機器を活用した授業を展開している。

農学部は、学部教育の集大成ともいえる卒業研究に重点を置いている。多様な形態で実施される授業科目を履修した学生は、卒業研究の実践をとおして、社会で活躍するために必要な、問題発見と問題解決の能力を高めている。

観点Ⅲ-1-3（シラバスの作成と活用）

全科目のシラバスは、本学共通のシラバス作成要領に従って作成され、オンラインシラバスとして、ホームページに掲載している。シラバスには、担当教員名・授業科目名・開講学期・開講曜日・時限などに加えて、授業計画・履修上の注意・成績評価の方法と基準・教科書・参考書・オフィスアワーを記している。学生は、シラバスにより、履修する授業科目の内容等を知り、履修科目を選択できる。教員は、授業の初回に、シラバスを用いて、授業内容・成績判定基準などを説明している。受講生は、シラバスと授業の内容が一致しているかという観点から授業評価を行っている。

観点Ⅲ-2 学生の主体的な学習を促す取組

(観点に係る状況)

観点Ⅲ-2-1 (主体的な学習を促す取組)

1年生および2年生を対象として、主体的な学習を促すための履修ガイダンスを実施している。教育研究分野(研究室)への分属が決定した学生には、当該分野の教員が、マンツーマンに近い形で学習(履修)を指導している。教員は、学生の居場所・勉強場所を研究室内にも確保するために最大限の努力をしている。

農学部本館(1号館)の改修を機に、学生が休憩・歓談するためのオープンスペースが確保された。授業が行われていない講義室は、学生が自由に利用できる学習スペースとして活用されている。

附属図書館には、自主的に学習する学生のための閲覧スペースとグループ学習室があり、学生は、パソコンによる図書・文献の検索や読書などを自由に行える。学生の読書意欲を高めるために、学生による選書制度を導入している。インターネットによる情報収集は、総合情報基盤センターでも、講義時間以外に学生が自由に使える。自主的学習の活性化に向けた組織的な取組は継続課題である。

観点Ⅲ-2-2 (成績の単位の実質化)

社会的に信頼される学業成績の評価と単位の実質化を進めるために、次のことを実施してきた。

①学生の予習・復習の時間を確保するため、各学期に履修登録できる単位数を25単位以下とした。②単位の実質化に必要な授業時間数を確保するため、代替日と予備日を設けた時間割を編成すると共に、特別の事情で休講した場合は補講を教員に義務づけた(休講届についての申合せ:平成18年10月)。③学力不足や勉強意欲が低下した学生を早期に見出すため、必修科目への出席や学業成績が不良な学生についての情報を教員間で共有する連絡体制を築いた。④高校における履修時間数が少ないために学力が不足している学生の勉強を支援するために、数学では学力別クラスを編成し、他の専門基礎科目(生物学、化学)では補習した。

学力試験に基づく成績判定を公平に行うために、定期試験の厳格な実施と、採点の厳格化を進めた。平成19年度に、成績評価平均値に関する規程を制定し、国際的な成績評価法ともいえるGPA制度を導入した。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

【水準】

教育方法は、期待される水準にある。

【判断理由】

- 1 総合科学である農学の理解に必要な授業形態(講義, 演習, 実験, 実習, 見学等)を組み合わせた教育を実施している。
- 2 学科改組により、各学科の教育目的に応じた、特色のあるカリキュラム編成と学習指導がなされた。
- 3 大学入門科目から卒業研究に至る教育体系が構築された。
- 4 主体的学習を促すための丁寧な履修ガイダンスを実施している。
- 5 建物改修を機に、学生の学習環境が整備された。
- 6 授業改善ならびに成績評価の厳格化が進んでいる。
- 7 直接的あるいは間接的に生物と関わる農学を修めた学生に対する社会的評価は高い。

分析項目IV 学業の成果

(1) 観点ごとの分析

観点IV-1 学生が身に付けた学力や資質・能力

(観点に係る状況)

観点IV-1-1 (在学中・卒業時の状況に基づく、教育の成果や効果)

学生に対する教育の成果・効果を示す単位取得状況は、表13のとおりである。

表13. 修得総単位数の平均値の推移

学科	入学年度(学年)			
	平成16(4年生)	平成17(3年生)	平成18(2年生)	平成19(1年生)
生物生産学科	129	103	—	—
応用生物科学科	123	103	—	—
応用生物科学科	—	—	62	19
生物環境科学科	—	—	59	18
生命機能科学科	—	—	59	21

(出典：教務情報システム成績管理データ)

備考1：農学部は、平成18年4月に、2学科から3学科に改組されている。

備考2：総単位数は、修業年限4年の学部学生が修得した科目の合計単位数を示す。

農学部は、学年ごとの進級判定は行っていないが、教育の質を保証するために、農学教育の要である卒業研究を開始する際に、卒業研究履修認定を実施している。履修が認定されない場合は、留年となる。学生に対する教育の効果・成果は、卒業時までの総合成績として計られる。

平成16年度から19年度の3月時点における全在籍者数に対する卒業者の割合(卒業率)は、以下のとおり(表14)である。卒業率は、修業年限4年の学生に限ると、やや高くなる。

表14. 年度別の卒業率の推移

年度	学科	在籍学生数(4年生)		卒業者数	卒業率(%)	
		総数(留年含む)	4年生		総数に対する割合	4年生に対する割合
平成16年度	生物生産学科	82	70	67	81.7%	95.7%
	応用生物科学科	102	92	90	88.2%	97.8%
	合計	184	162	157	85.3%	96.9%
平成17年度	生物生産学科	86	74	70	81.4%	94.6%
	応用生物科学科	96	87	84	87.5%	96.6%
	合計	182	161	154	84.6%	95.7%
平成18年度	生物生産学科	87	73	72	82.8%	98.6%
	応用生物科学科	95	87	81	85.3%	93.1%
	合計	182	160	153	84.1%	95.6%
平成19年度	生物生産学科	84	73	70	83.3%	95.9%
	応用生物科学科	96	87	84	87.5%	96.6%
	合計	180	160	154	85.6%	96.3%

(出典：教務情報システム学籍管理データ)

学部卒業後の就職先と関連する資格を取得した学生数は、表 15 のとおりである。

表 15. 年度別の各種資格取得者数及び申請有資格者数の推移

資格の種類	入学年度				備考
	平成 16	平成 17	平成 18	平成 19	
教職免許	14	24	20	18	高校農業，高校理科，中学理科の免許取得者の合計数
家畜人工授精師	3	1	6	9	講習会修了者数
農業改良普及員	157	152	144	154	農学部卒業生を示し，卒業後に 4 年以上の実務経験を経て，農業改良普及員の受験資格を得る。
測量士補・測量士	21	31	21	19	所定の単位取得者数
土木施工管理技士	21	31	21	19	所定の単位取得者数
食品衛生管理者	25	27	23	27	食品衛生コースの科目履修者数
食品衛生監視員	25	27	23	27	食品衛生コースの科目履修者数

(出典：教務情報システム履修管理データ及び教務情報システム成績管理データ)
 学業成績優秀者を対象とする農学部長表彰者は各年度 4 名である (4 学系から各 1 名)。

観点Ⅳ－２ 学業の成果に関する学生の評価

(観点に係る状況)

観点Ⅳ-2-1 (学業の成果の到達度と満足度)

成績評点平均値に関する規程の制定に基づく GPA 導入，授業評価の厳格化等が進行中であり，また，学科改組後の学年進行中であるため，入学年度が異なる学生の学業成績を比較することは難しいが，平成 16 年度～19 年度の入学者の学業成績 (取得単位数) は表 13 に示したとおりである。

授業に対する満足度を測るための「学生による授業評価」は継続的に実施している。評価の結果は授業科目によって異なるが，専門科目の多くで比較的高い評価を得ている。授業評価で指摘された「優れた点と改善を要する点」の検証結果と次年度の授業改善目標を「授業点検・評価報告書」として教員が提出するようにしたことにより，授業改善が進んだ。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

【水準】

学業の成果は，期待される水準にある。

【判断理由】

- 1 「優」の取得率が高く，授業内容が学生に理解されていると考えられる。
- 2 過去 4 年の卒業率は，卒業研究履修認定を保留された学生を除くと 93% 以上，認定保留者を含めると 81% 以上である。
- 3 「学生による授業評価」において，おおむね良好な評価を得ている。
- 4 授業評価の結果の利用等を通じて，授業改善が為されている。

分析項目V 進路・就職の状況

(1) 観点ごとの分析

観点V-1 卒業後の進路の状況

(観点到に係る状況)

平成16年度から19年度の就職率は、就職意欲を高める就職説明会の開催や、社会人となるためのキャリア教育の成果、さらには経済状況を反映して、表13のとおり推移し、学部卒業生は86～97%、大学院修了生は86～100%であった(表16)。

就職先の内訳は、平成18年度の場合(卒業生153名)、民間企業76名、官公庁12名、国立大学法人等1名であった。卒業生の地域別就職先は、福岡県が約30%、佐賀県が12%であった。農業関連の職業、食品関係や公務員に多くの卒業生が就職していることから、農学部の教育目的は達成されており、教育効果は上がっている。

大学院修士課程への進学者数は、平成16年度57名、平成17年度42名、18年度43名、平成19年度50名であった。就職率が上がるにつれて進学率は低下する傾向を示した。

表16. 農学部卒業生と農学研究科(修士課程)修了生の就職率

区分	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
農学部卒業生	86.0%	90.3%	96.9%	97.9%
農学研究科修了生	92.9%	85.7%	100.0%	100.0%

備考：平成16～18年度は5月1日現在、平成19年度は平成20年5月現在の就職率を示す。

(出典：佐賀大学就職統計)

観点V-2 関係者からの評価

(観点到に係る状況)

農学部は、全学就職委員会と共に、就職に関するアンケート調査を平成17年度に行い、公務員関係16、製造業(食料品、飼料)13、製造業(医薬品、農薬)10、協同組合6、卸売・小売業5、教育関係5に加えて、製造業(機械器具)、建設コンサルタント、農業法人、飲食店、建設業、情報通信業から回答を得た。採用時および採用後の農学部卒業生の資質について、企業(68社)から高い評価を得た(表17および表18)。

表17. 採用時における農学部卒業生に対する企業の評価

評価項目	回答数			
	非常に満足	満足	やや不満足	不満足
専門基礎の知識と能力	6	46	5	0
実験などの基礎技術	5	43	19	0
外国語能力	2	23	19	2

(出典：就職先企業に対するアンケート調査結果)

表18. 採用後の農学部生に対する企業の評価

評価項目	回答数			
	良く適応	適応	やや不適応	不適応
職場環境への適応	17	39	1	0
会社への貢献	非常に貢献	貢献	やや貢献	貢献なし
	9	44	5	0

(出典：就職先企業に対するアンケート調査結果)

農学部卒業生に対して、就職先企業から、「積極性」、「企画力」、「創造力」、「リーダーシップ」、「社交性」などの向上が求められている。また、在学中に取得が望ましい資格として、外国語能力、危険物保安監督者、農業改良普及員、測量士、技術士補、試験設計組立、MCA、MCP、運転免許、教員免許状などが挙げられている。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

【水準】

進路・就職の状況は、期待される水準にある。

【判断理由】

- 1 就職率は、経済状況の好転に伴い上昇し、90%以上の水準にある。
- 2 農学部卒業生に対する企業の評価はおおむね良好であり、雇用者の期待に込んでいる。
- 3 企業の評価結果に基づいて、就職状況が分析されている。
- 4 就職者の42%が福岡や佐賀県で就職しており、北部九州の地域社会に貢献している。

III 質の向上度の判断

1. 教育体系と教育内容の改善（分析項目I，II）

2006年度の学科改組を機に、各学科の教育目的の明示、学習内容の明確化、ならびに特色あるカリキュラムの構築を進め、教育体系と教育内容を向上させた（表19）（中期計画番号：008，046，050）。

表19. 改組前と改組後の学科構成とカリキュラム

区分	学科構成	入学定員	教育目的に基づく区分 (学系またはコース)	教育研究分野数
改組前	生物生産学科	65	生産生物学系	8
			環境情報工学系	6
	応用生物科学科	80	応用生物学系	12
			生物化学系	8
改組後	応用生物科学科	45	—	13
	生物環境科学科	60	生物環境保全学コース	13
			資源循環生産学コース	
			地域社会開発学コース	
生命機能科学科	40	—	7	

(出典：佐賀大学学則及び佐賀大学農学部規則)

2. 地域との連携による教育活動の充実（分析項目II）

農学部、農学部附属資源循環フィールド科学教育研究センターならびに地域（自治体・団体・NPO）との連携に基づく地域貢献活動（例：伊万里はちがめプラン、蕨野の棚田支援、水みちマップ運動への参加、食育教育、等）を極めて活発に実施し、高い社会的関心と評価を得た。本学が平成17～19年度にかけて実施した「地域創成学生参画教育プログラム」に参加した学生は、フィールドでの実習・活動をとおして大きく成長し、総合科学である農学教育が質的に向上した（表20）（中期計画番号：009，126）。

表 20. 地域創成教育プログラムに対する受講生の評価

事項	平成 17 年度	平成 18 年度
シラバスの記載（成果）の達成度	8.3	13.0
問題解決の知識・技法の習得度	10.7	20.0
地域社会の課題に対する理解度	15.0	25.2
他の関連科目に対する受講希望	23.2	27.0
講義形式以上の学習意欲の高揚	31.9	28.5
授業科目に参加（履修）する価値	35.9	44.4

備考：数値は、本プログラムの目的に「よく当てはまる」と回答した受講生の割合（％）を示す。

（出典：佐賀大学地域創成学生参画教育プログラム推進委員会編「大学教育と地域創成－佐賀大学の教育実践－」p18）

3. 高校教育から大学教育への接続と転換教育の充実（分析項目Ⅱ，Ⅲ）

高校との連携に基づく諸活動（ジョイントセミナー，出前講義，出前実験，学部説明会，専門高校との懇談会，等）を継続的・積極的に実施することにより，農学部における教育・研究内容についての高校生の理解を深めた。農学部入学者に対しては，履修ガイダンス，大学入門科目，学力別クラス編成，補講などを継続実施するとともに，チューター（担任）制度と，学力不足・勉学意欲低下の学生を早期に把握するための情報を教員間で共有する連絡体制を築き，初年次学生に対する教育指導を向上させた（表 21）（中期計画番号：024，027，075）。

表 21. 農学部教員のジョイントセミナー実施実績

	平成 15 年度	平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度
担当教員数	23	31	34	27	33
実施高校数	24	32	37	28	33

（出典：アドミッションセンター入試統計資料）

4. 学習環境整備と学習指導法改善（分析項目Ⅲ，Ⅳ）

建物改修により，講義室・演習室・学生実験室等の学習環境改善，IT 関連授業用の講義室整備，学生用コミュニティスペースの設置等の学習環境が格段に改善された。法人化後必須となった労働安全衛生法遵守の一環として，「実験実習における安全の手引き」の改訂版を学生へ配布・説明し，安全確保に努めた。「学生による授業評価アンケート」の実施と，授業評価の結果に基づくシラバスの改善・更新・公開により，教授法が向上した。授業改善と関連する学科改組後の農学部専門科目の単位取得状況は，表 22 のとおりである（中期計画番号：021，060，061，063，067，072）。

表 22. 学年別の専門科目の単位取得状況

科目区分	1 年生（平成 19 年度入学）			2 年生（平成 18 年度入学）		
	履修登録者	合格者	合格率（％）	履修登録者	合格者	合格率（％）
専門基礎科目	512	482	94.1	563	523	92.9
農学基礎科目	403	330	81.9	693	614	88.6
必修科目	561	477	85.0	1731	1601	92.5
選択科目	130	92	70.1	1204	1014	84.2
自由科目	32	20	62.5	138	118	85.5

（出典：農学部・農学研究科「平成 19 年度授業評価と改善に関する実施報告書」）